

これまでの検討における子どもの居場所に関する主な意見

○各委員より（第3回委員会までの会議及びアンケート等）

- ・子どもの悩みや不安なことは、親や学校とは関係のない場所で解決していくことが多く、その場所は子どもによっても様々なので、市内に子どもファーストの居場所が多くあることが必要。
- ・相談窓口を増やすだけでは、子どもからの相談は増えない。地域の様々な居場所において、信頼できる人、安心できる人と接する中で、子どもから話せる関係ができるのではないかな。
- ・わざわざ相談しに行くのではなくても子どもが話せたりこぼせたりするような場所が身近にあると良い。
- ・単なる相談窓口へはなかなか相談に来なくても、子どもたちが集まりやすい場所を作ろうと意識すれば、子どもたちはちゃんとそこに来る。そのような場所に必要に応じて専門職が出張するような形で、子どもが相談できるスペースを作っていくことも大切だ。
- ・スクールソーシャルワーカーやそれぞれの居場所のスタッフが、相談機関、専門機関につなぐことのできるような連携システムの構築が重要だ。
- ・一口に居場所と言っても、子どもの思いやニーズも多種多様なので、その子に合わせた居場所が必要だ。
- ・子どもが中心となる居場所（屋根のある場）が市内にないと感じる。子どもが自由に安心して過ごせる児童館のような施設がコミセンと同じ数くらい必要。
- ・居場所としては、単に今あるコミュニティセンターのような建物を使えばいい、ということではなく、やはり児童館のような子ども専用の施設が必要なのではないかな。
- ・ハード面の居場所もやはり重要だ。最近は公園も規制が厳しく、コミセンもなかなか使いづらいとなると、とくに部活に入っていない子どもなどは、放課後過ごすための居場所が不足している。
- ・スポーツを気軽にできる場所が少ないと感じる。
- ・子ども食堂や学習支援教室の支援者が市に望むこととして、場所の確保がある。自由に行って時間を過ごす場所、高齢者向けのテンミリオンハウスのようなものが、子どもに対してもあると良いのではないかな。
- ・建物だけではなく、多様な活動を行っている民間団体への支援という、ソフト的な取り組みを充実させ、子どもの選択肢を増やす必要がある。
- ・居場所にはソフト面のものもある。むさしのジャンボリーをはじめ、市内には地域のいろいろな行事があるが、そういった活動も子どもの居場所になっている。
- ・学校こそ、子どもが安心して過ごせて、学びに来たいと思えるような居場所であるべきだ。学ぶ権利の保障にもつながる。多様性、ダイバーシティを重んじた学校づくりも重要だ。
- ・地域に居場所があっても、そこまで行けない子どももいるかもしれない。他自治体の例では、学校の中に、気軽にお茶が飲めて、ちょっと愚痴が言える、世間話ができるといった、地域の方が運営する居場所を設けた例があり、ヤングケアラーの支援等にも効果があった。
- ・学校以外の居場所に行きたくない、という子どももいる。すべての子どもの居場所という意味では、あそべえや学童クラブなど、学校の中に安心できる居場所があることが重要だ。
- ・学校には来られるが、教室には入れないという子どももいる。放課後ではなく授業中の、学校内の居場所というものも真剣に考えたほうが良いのではないかな。

- ・不登校の子どもでも、何かの機会で学校に来たときに、ふらっと寄って、何するわけでもなくていいし、勉強したい子は勉強すればいいし、誰か大人としゃべりたい人はしゃべればいい、という場所があると良い。
- ・学校の現場でも、不登校の一步手前の、保健室に通っているような子どもが一定数いることは認識しており、各校にチャレンジルームのような居場所を求める声もある。ただし、場所と支援人材の確保の問題があり、実現が難しいのが現状だ。
- ・義務教育を終えた高校生とか、高校を中退した子どもとか、未成年の方の居場所も必要だ。それまでのつながりを何とかつないで、その後の進路に役立てるような仕組みがあると良い。
- ・居場所についても、子ども支援と若者支援はもう両方をつないで考えなければいけない。子ども・若者支援の居場所問題というのを改めて考えなければいけないと感じた。
- ・居場所における支援人材の育成も必要だ。現状ではなかなか人材の確保も難しくなっていると聞く。こうした支援者の支援が重要になる。
- ・居場所の問題と合わせて、学ぶ権利の保障を考えることも重要だ。不登校の子どもが、学校外の居場所をベースとしながら、学校に戻っていくコースも、そうではないあり方もある。そういう選択肢を広げていくという活動も今後重要になってくる。
- ・子どもが追い立てられるように過ごすのではなく、遊ぶ権利、自分らしく生きる権利、休息する権利などを実現できるような居場所づくりが重要だ。
- ・子どもの居場所の存在を、子どもに対して分かりやすく情報提供することが重要だ。

○子ども・コミュニティ食堂及び学習・生活支援事業実施団体との意見交換会（10/20）における主な意見

- ・コミセンなどの既存の施設で、子どもの居場所を確保できるような取り組みはできないか。
- ・年齢を重ねていくと、子どもの声のような高音を雑音と感じる傾向があると聞いた。地域の方の理解を得ながら、防音性の高い、子どもの新たな施設が必要と感じている。
- ・既存の施設を子どもの居場所として使うには解決すべき課題が多く、新たな施設を作る方が早いように感じる。
- ・子どもテンミリオンハウスのような、明確な子どものための居場所を公的に作れないか。
- ・学校でもない、家庭でもない、誰でもいつでも来られる子どものための第三の居場所が必要と強く感じる。
- ・チャレンジルームには給食が無く、お弁当を持参することとなる。子どもたちの学ぶ権利を守るためにも、学校以外にも、学校と同じように学び、生活をする事ができる居場所が必要ではないか。
- ・チャレンジルームで対応できない子どもを、ほかの機関につなぐなどの支援が必要ではないか。
- ・コミセンなど、夜間は子どもだけで利用できない施設も多い。大人の中で「子どもは夜、家に帰るべき」という意見が強いように感じる。現状は、家に帰っても居場所がない。子どもの「今」を大人に知ってもらう取り組みも大切である。
- ・現実につらい思いをしている子どもが多くいる。24時間体制で子どもを支援できる仕組みを作りたい。
- ・民間づくりを行う団体は財政基盤が弱い傾向がある。どのように支援できるか、条例の検討の中で考えていく必要があるのではないかな。
- ・子どもの居場所づくりに関する将来の人材確保についても大きな課題がある。